The Elder Scrolls IV OBLIVION Re:PLAY

さる〜ゐん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｈｅ　Ｅｌｄｅｒ　Ｓｃｒｏｌｌｓ　ＩＶ　ＯＢＬＩＶＩＯＮ
Ｒｅ：ＰＬＡＹ

【Ｎコード】
Ｎ６６５０Ｘ

【作者名】
さる～ゐん

【あらすじ】
タムリエル大陸の中央に位置する、シロディール。
この帝国が支配する美しき自然豊かな地を舞台に、異国から渡航してきた少年と少女が冒険を繰り広げる。
海外の人気オープンワールドＲＰＧ『オブリビオン』のＭＯＤに基づいたオリジナル要素を含んだリプレイ小説。

プロローグ（前書き）

初のゲームリプレイ作品です。
しかもあのオブリビオン。自由度高くて気ままに冒険できるＲＰＧです。
それではどうぞ、お楽しみください！

プロローグ

シロディール――タムリエル大陸の中心をなす地域。
北をノルド族の地スカイリム、東をダークエルフ族の地モローウィンド、南を獣人カジート族の地エルスウェイアに囲まれた、自然に恵まれた地。
シロディールを支配する帝国の都を中心に、西端の湾港都市アンヴィル、スカイリムに近い降雪地帯のブルーマ、東部の森林に囲まれたシェイディンハル、帝都の港へと通じる南部のニーベン川河口に位置するレヤウィンといった都市が囲むように存在する。
今、一隻のガレオン船がニーベン川を上り、帝都の港を目指している。

船頭「あれはブラヴィル、トカゲどもが住み着いた汚い街さ」

レビン「ブラヴィルかぁ、あともうちょっとで帝都に着くね」

ヴァージニア「そうね、レビン。楽しみだわ」

ガレオン船に乗る二人の乗客、レビンとヴァージニア。
彼らは遠い大陸からはるばるこのシロディールへとやって来た。
レビンは甲冑に身を包んだ騎士の少年。一方のヴァージニアは魔道士の少女である。

船頭「嬢ちゃん、一昔前のＲＰＧに出てきそうなビキニ鎧で風邪ひかねえのか？」

ヴァージニア「平気よ。シールドと冷気防御の魔法が掛けられているから寒さは感じないわ。それにあまり着こむと呪文の有効性が低下するの。だから魔道士にとってはなるべく肌を露出したほうがいいのよ」

レビン「僕みたいに鎧着てると有効性がガタ落ちになるしね」

船頭「ならいいんだ。でも目のやり場に困る……」

やがてレビンたちの視界にニーベン川の水源である湖に浮かぶ城塞が映る。

城壁で囲まれた都市の中央から塔が天に届くばかりに伸びているように見える。

船頭「あれが帝都だ」

レビン「すごい！　あれが帝都！」

ヴァージニア「でも外から見ただけじゃ、スケールが小さく感じるわ」

船頭「そろそろ波止場だから、ついたらじっくり見学してきなよ」

ガレオン船は、帝都の波止場に到着する。

甲板から埠頭へと板が敷かれ、レビンとヴァージニアは初めてシロディールの地を踏む。

船頭「あまり寄り道せず城壁の中に入りな。寄り道して万一のことがあったら保証はできないぜ」

レビン&ヴァージニア「ありがとう！」

レビンとヴァージニアは埠頭から帝都城壁へと向かって歩く。
その道中でうわさ話が聞こえてくる。

通行人A「なあ、グレイ・フォックスって知ってるか？」

通行人B「ああ、灰色の覆面を被った泥棒だろ？　お偉いさんはいないいないの一点張りだがな」

通行人A「あんたは信じてるのかい？　奴の存在を」

通行人B「もちろんだとも。あんなカリスマがいなけりゃ、盗賊になりたがる奴など増えやしないよ」

レビン「ジニー、グレイ・フォックスなんて盗賊がいるんだって」

ヴァージニア「聞くからには結構有名みたいね。でもわたしには泥棒になるなんてごめんだわ」

レビン「だよね。僕たちは盗んじゃいけないってさんざん親から言われてるしね」

レビンとヴァージニアは、グレイ・フォックスの話題を耳にした後、城壁の前へとたどり着く。

ヴァージニア「いよいよ、この門を開ければ……」

レビン「僕たちは帝都へと踏み出すことになるね。それじゃ、行くよ」

ヴァージニア「ええ！」

二人は一緒に門を開けた。
すると、そこには石造りの豪華な街並みと立派な神殿があった。

レビン「これが、帝都……！」

ヴァージニア「なんて素晴らしい街並みなのかしら！　聞いた通り……いいえ、想像以上だわ！」

帝都の街並みに感激する二人。
こうして、レビンとヴァージニアのシロディールでの冒険が始まった。

仲間探し（前書き）

今回は、レビンたちがシロディールの案内人を探すお話です。

仲間探し

シロディールの帝都に踏み入れたレビンとヴァージニア。
波止場に隣接した神殿地区を見まわった後、ふたりは『白金の塔』のある中央部へとたどり着く。

レビン「うわー、ここが皇帝の住む塔……」

ヴァージニア「すごい迫力ね。間近でみると、こんなにも大きいなんて！」

レビン「そうだ、塔の中に入ってみようよ」

ふたりは、塔の中に入ろうとして、扉のそばに立つ衛兵に尋ねる。

レビン「あの、塔の中に入りたいんですが」

衛兵「観光客か。かまわないが、廊下しか見学できないぞ」

ヴァージニア「レビン、どうする？　廊下しか見られないみたいだけど……」

レビン「いいや。　廊下だけでも見れれば十分だよ」

ふたりは扉を開け、塔内の見学をはじめる。

レビン「皇帝が住むだけあって、建築様式も凝ってるね～」

ヴァージニア「なんたって皇帝の住処ですものね。建築家の気の入り様が伺えるわ」

ここでレビンが、中心部の部屋への扉に関心を向け、衛兵に話す。

レビン「衛兵さん、この部屋は？」

衛兵「この中は元老院議事堂。今はオカート総書記官しかいないよ」

ヴァージニア「皇帝はいらっしゃらないのですか？」

衛兵「ああ、今陛下は監獄である囚人に会われておられる。理由はわからぬがな」

レビン「そういえば皇帝の名前って何と言うのですか？」

衛兵「ユリエル・セプティム七世だよ」

こうして、レビンたちは塔内の見学をひと通り終え、塔から外に出る。

レビン「ねえ、ジニー」

ヴァージニア「なあに、レビン？」

レビン「僕たち、あまりシロディールに詳しくないよね。だからガイドになってくれる人が欲しいんだけど」

ヴァージニア「それもそうよね。確かに無知なままじゃ危険だものね」

レビン「うん。だからこの国に詳しい冒険者を募りたいと思うんだ」

衛兵「正しい判断だな。外には猛獣や野盗がうようよしてる。案内人は必要だな。仲間を募りたいなら、冒険者の集まる宿にいくといい」

レビン「衛兵さん、その宿屋ってどこにあります？」

衛兵「宿屋なら西のタロス広場、北西のエルフ・ガーデン地区、北東の商業地区に一つずつあるよ」

レビン「ありがとうございます。それじゃヴァージニア、ひとまずタロス広場の宿屋に行ってみようか」

ヴァージニア「そうしましょう、レビン」

レビンとヴァージニアは、中央地区を抜け、西部のタロス広場に入る。

レビン「ここがタロス広場かぁ。真ん中にはドラゴンの像があるね」

ヴァージニア「しかも門のほうに顔を向けているわ。まるで、侵入者がいないかどうか睨みつけているみたいね」

レビン「そういえば最初に訪れたとこの神殿もドラゴンに関係しているって話を聞いたし、帝国はドラゴンとなんか関係があるのかな」

ふたりはドラゴン像に感心しつつ、宿屋『タイバー・セプティム・ホテル』を見つける。

そして宿屋に入ると、そこには金髪でポニーテールの幼い女の子が宿屋のロビーでくつろぐ冒険者に手当たり次第尋ねているのが見える。

ヴァージニア「あの子、幼く見えるけど見るからに家柄がよさそうな子よね」

レビン「冒険者を募っているようだけど、拒否されつづけているみたいだね」

すると金髪の女の子が、レビンとヴァージニアに近づいてくる。

女の子「あなた方も冒険者ですの？」

レビン「うん、そうだけど」

女の子「わたくしはメアリーと申しますわ。帝都の外に興味を持ったのですけど、一人では危険なので仲間を募っていましたの。しかしわたくしの小さな姿では、誰も失笑しては聞き入れてくれないのです。あなた方なら聞き入れてくれそうで、よろしければわたくしもお仲間に入れていただけませんか？」

ヴァージニア「わたしたちは遠い異国から来たのだけど、それでもいい？」

メアリー「構いませんわ。あなたたちは異国の旅人なのですね、ならわたくしがシロディールのことをあなたたちに教えて差し上げますわ」

レビン「よかった。この子、シロディールの地理に詳しいみたいだよ？」

ヴァージニア「小さい女の子でもこの国の住人だし、案内役には良いかもね」

レビン「というわけで、僕たちで良かったら一緒に行こう」

メアリー「まあ、ありがとうございますわ。あなた方のお名前は？」

レビン「僕はレビン」

ヴァージニア「わたしはヴァージニアよ」

メアリー「レビンにヴァージニアという名前なのですね。どうかよろしくお願いいたしますわ」

こうして、貴族の娘メアリーがレビンたちの仲間に加わった。

仲間探し（後書き）

案内人はなんと幼女！しかもお嬢様口調！
個人的趣味出まくりですみません…

さて、次回のお話は初めての洞窟探索です。

レビン

＞i331０２―４２００＜
【名前】レビン
【種族】異邦人（ＢＰ２ｃｈの人間）
【性別】男
【年齢】１６
【クラス】騎士（戦士系）
【装備】長剣、盾、重鎧
【スキル】防御、幻惑、重装、殴打、刀剣、話術、格闘
【プロフィール】
遠い大陸からやってきた騎士の少年。
幼い頃からシロディールに憧れており、両親を説得して幼馴染のヴァージニアと共にシロディールへと渡航する。
温厚で礼儀正しく、未知への好奇心が強い性格。
魔法には疎いが、戦闘においては重鎧による耐久力を生かして仲間の盾として活躍する。

レビン（後書き）

使用ＭＯＤはＢｅａｕｔｉｆｕｌ　Ｐｅｏｐｌｅ　２ｃｈです。
みてみんにオブリのキャプチャ画像をＵＰしておりますが、問題がある場合に消すかもしれません。

プロフィールは設定が固まり次第順次追記していく予定です。

ヴァージニア

＞i331103―4200＜
【名前】ヴァージニア
【種族】異邦人（BP2chの人間）
【性別】女
【年齢】16
【クラス】アマゾネス（魔道士系）
【装備】両手斧
【スキル】殴打、軽業、破壊、変性、回復、神秘、錬金術
【プロフィール】
幼馴染のレビンと共に遠い大陸からやってきた魔道士の少女。愛称ジニー。
冷気魔法と回復魔法が得意だが、華奢な体ながら両手斧を振るっても戦える女戦士。
シールドと冷気防御の魔法効果を宿したビキニアーマーを身につけているが、これは肌を露出することで魔法の効力を高めるため。
性格はビキニ鎧の女戦士のイメージに似合わず女性らしくおっとりしているが、幼い頃からの縁で何かとレビンに接する世話好きの一面も持つ。

ヴァージニア（後書き）

実質コンパニオンＭＯＤの自作コンパニオン晒し記事となってしまいました。
こういった『女らしい華奢な女戦士』は私のツボでして、個人的な趣味の詰まったキャラになっています。

使用ＭＯＤはＢＰ２ｃｈとＨＧＥＣ用ビキニＭＯＤ、他にもサークレットや某手袋ＭＯＤ、某衣服ＭＯＤのブーツを使っています。

メアリー

＞i３３１０８―４２００＜
【名前】メアリー
【種族】インペリアル
【性別】女
【年齢】１０
【クラス】軽業師（隠術系）
【装備】弓、小剣
【スキル】開錠、隠密、軽業、射手、防御、刀剣、話術
【プロフィール】
帝都に住む貴族の子女。金髪のポニーテールとミニスカートが特徴。帝都の外の世界に興味を持ち、弱冠一〇歳にして冒険者として旅立とうとする。
一人では危険だとしてタロス広場の宿屋で仲間を募っていた所で案内人を求めるレビンたちと出会い、彼らの案内人を務めることになる。
小さいながらも貴族らしい高貴な振る舞いを身につけており、弓や剣術なども嗜んでいる。
なぜか盗賊の技能も所持しているが、その経緯に関しては謎である。

メアリー（後書き）

設定上はインペリアルですが、キャラメイクでの種族はＢＰ２ｃｈの人間を使っております。
他にはＲｅｄ　Ｃａｒｍｉｎｅという服ＭＯＤやマントＭＯＤを使っております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6650x/

The Elder Scrolls IV OBLIVION Re:PLAY

2011年10月19日03時11分発行